(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名　伊藤　賢一

本論文の目的は、しばしば、フランクフルト学派の批判理論の後継者とみなされることの多いハーバマスの社会理論を、むしろ支配の理性化を探求する独自のデモクラシー理論として再構成して提示することにある。著者は、序論においてハーバマス社会理論への既存の理解と批判をレヴューしたのち、1章で公共圏理念をハーバマス理論の出発点かつ一貫した問題関心として位置づけ、2章で 1960 年代の彼の知識社会学的な理論構築の試みが困難に直面したことを確認する。3章では、ハーバマスにとっての言語論的転回の意義を、批判理論的ジレンマから脱却したコミュニケーション的行為における了解可能性の定立として捉えるとともに、同時に提示された生活世界の植民地化テーゼには依然としてアポリアが内在していたことを指摘する。4章から6章にかけて、その後ディスクルス倫理学として構築されてきたハーバマスの理論構造を詳細に分析し、いわゆる正義の合意説について、社会の多元性を合意によって押しつぶす統合理論的なものとみる通常の解釈を批判し、正統性の超越的な理念を概念化する試みとする新たな解釈を提示する。これを著者は「発見する装置としてのディスクルス」と呼ぶ。それは、法秩序の強制力という事実性と規範的正義という妥当性とのあいだの緊張関係をコミュニケーション権力と行政権力との権力循環とみなす定式化に展開されていると著者は論じる。7章では、以上の分析に基づいて、既存のハーバマス論における誤解を批判的に考察し、終章では公共性のメタ理論家としてよりはむしろ市民的公共圏の中の一員としてのハーバマスの実践的活動を紹介している。

本論文は、入手しうる限りのハーバマスの全文献と広範な関連文献とを丁寧に渉猟し、通説に対抗する独自のハーバマス社会理論の像を、社会学的探求を踏まえた規範的公共性理論を一貫して展開し続けてきたものとして鮮やかに描き出した画期的な論考となっている。なお、ハーバマス理論を今日の公共哲学および社会哲学の全般的布置状況の中に位置づける作業が、より積極的に試みられてもよかったという感もあるが、これまでのハーバマス研究を超える新たな観点を打ち立てるという本論文の目的は十分に達成されていると高く評価できる。

以上により、審査委員会は、本論文が博士(社会学)を授与するに値するものとの結論をえた。